

## 午後の部：【イタリア大使館別荘】

設計者：アントニン・レーモンドについて

帝国ホテルの設計に際しフランク・ロイド・ライトと共に来日したのをきっかけに、日本に魅了され、400件を超える設計を手掛けたレーモンドは彼自身の作品のみならず、彼の事務所で働いていた吉村順三や前川國男らの仕事をとおして日本のモダニズム建築に大きな影響を与えることに成りました。高崎の群馬音楽センターや軽井沢聖パウロ教会などでよくご存じの方も多いためです。

そんな多くの日本人建築家に影響を与えたアントニン・レーモンド。午後の部では中禅寺湖畔にたたずむ、彼の住宅作品の名作の1つ《旧イタリア大使館別荘》を見学します。

奈良時代の日光開山以来、聖地とされた奥日光の中禅寺湖畔は、涼しい気候、息をのむような美しい自然、東京から北にわずか180キロメートルという地理的条件から、明治時代(1868-1912)後期には国際外交コミュニティに好まれる避暑リゾート地日本を代表する外国人避暑地となり、「夏は外務省が日光に移る」と言われるほどでした。本邸は、昭和3(1928)年、建築家アントニン・レーモンドが設計。イタリアの避暑地コモ湖を彷彿とさせる中禅寺湖の景色を最大限取り込む独特の平面プランニング、日本家屋と欧米生活様式の融合を図ったディテール、市松調模様などの内外装を杉皮貼りにしたモダンながら野趣あふれる、東洋と西洋のデザインが美しく融合したたぐいまれな建物です。歴代のイタリア大使が使用してきましたが栃木県に譲渡され復元された後、家具や食器などの調度品をほぼそのまま残す形で平成9(1997)に一般公開されました。

イタリア大使館別荘プロジェクトを引き受けたレーモンドは、ともに帝国ホテル設計にも携わっていた内山隙三、そして伝統的工法だけでなく新しい技術を取り入れることにも抵抗のなかった日光大工の名棟梁・赤坂藤吉と協働して作業を進め、オープンプランの間取りに伝統的な尺貫法を用い、赤坂藤吉は建材選びや、天然の木材の扱いにおいて驚くべき能力を発揮しました。1階は中央のリビングと暖炉のある食堂、書斎がひとつの空間につながるよう設計されており、開放的なつくりが特徴的。2階は主にベッドルームが配置されています。“材料も、技術も、地元のものを使って建てるから面白い”とレーモンドは語っていたようで、外壁・内壁は日本の伝統模様である市松模様・網代模様・矢羽根模様を日光のスギ皮・こけら板で張り、割竹で押縁をした仕上げとなっています。家具などの調度品はレーモンドの妻であるデザイナーのノエミ夫人のデザインとされ、モダンでありながら日本建築の伝統を反映したレーモンドのデザインは、用いた自然素材と絶妙に一体化して建物が周囲の環境に溶け込んでいるようです。



アントニン・レーモンド



1階 居間



1階 広縁